
僕と幻想郷と召喚獣 外伝

影月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と幻想郷と召喚獣 外伝

【Nコード】

N6091Z

【作者名】

影月

【あらすじ】

僕と幻想郷と召喚獣の過去編です。バカテス欄にありますが、メインは東方で明久しかでません

予告（前書き）

読みにくいかも…

予告

「やあ、また来たね」

「夢？この頃よく見るな…」

「赤い霧、異変ね。面倒ね」

「明久がしたいようすればいい」

「あなたは食べてもいい人間？」

「な、勝手に私の領域に入るな…!!」

「私は門番です。如何なる理由があろうと、許可なく此処は通せません!!」

「…貴方…私の能力が効かないのですか？」

「そう、私が此処の主…レミリア・スカーレットよ」

「お兄さん遊びましょう」

「結界を張ってるから、その子の治療を早く!!」

「お願い、明久!!目を覚まして!!」

「君は絆を力に出来る。それは君を導く光になる」

「もうお姉様なんか…こんな世界なんか大っ嫌い!!」

「それが君達を苦しめる鎖くわだと言っいのなら…」

「僕は、運命きみたちを殺すくってみせる!!…!!」

僕と幻想郷と召喚獣外伝
紅魔館赤い霧編

近日公開！！

「偶然とは言え『真理の扉』を開けてしまった君は選択に迫られる・
・でも、私は信じてるよ明久・・・」

予告（後書き）

あるアニメの次回予告見たいに書きました

第1話 紅魔館赤い霧変 始まり(前書き)

時間系列は適当です

第1話 紅魔館赤い霧変 始まり

「……………」

「あら、また来たのね」

声が聞こえる……でも暗くて見えないし、動けない……

「精神体だけとはいえこうも……に何度も来るなんてありえないわよ？」

此処は何処だろうか……聞きたいけど声も出ない

「そうそう、今日貴方は大切な選択にせまられるわ。頑張りなさいね」

そして僕は沈んでいく……

「また……あの夢か……」

声だけが聞こえる夢……だけど夢にしてはものすごくリアルだ……

「大切な選択？」

そう、これは運命の始まりであり、僕こと吉井明久の始まりのお話

僕は中学生開始を4月に控え、休みなので幻想郷に来ていた。

「幻想郷」・・・それは妖怪、人、神、いろいろなモノたちが共に暮らす世界だ

「さて、起き・・・外が赤い？」

外は赤い霧で包まれていた

「おはよう、慧音」

「やあ、おはよう明久」

「これって・・・」

「ああ、外か。多分異変だろうな」

異変・・・ってことはやっぱり霊夢は動くのかな？」

「巫女のことか心配か？」

「え？あ、うん。やっぱり友達だしね・・・」

「気になるなら行ってもかまわないよ」

「え・・・」

「明久がしたいようすればいい」

「慧音・・・」

「た・だ・し！！無事に帰ってきてること。これだけは約束してくれ」
「・・・うん！わかった、行ってくるよ」

僕は慧音宅を飛び出し、博麗神社へと向かった

少年移動中

「霊夢」

「あら？明久来たの？」

「おつ、明久じゃねえか」

「あ、魔理沙もいたんだね」

神社に着くと魔理沙もいた

「霊夢、これってやつぱり・・・」

「ええ、異変ね。面倒よね」

「あはは」

いつもどおりだな

「明久はどうするの？」

「心配だし、ついて行くよ」

「わかったわ」

「でどこ行くんだ？」

「そうね・・・」

霊夢が僕を見てくる

「霊夢の感どおり行けばいいと思うよ」

「それもそうね。なんだかあっちのほう霧濃いし、あっち行きま
しょう」

「了解」

「んじゃ、いくぜ」

僕達は出発した

第1話 紅魔館赤い霧変 始まり（後書き）

現時点での明久

霊力と魔力がちよつと使える

空の飛行は浮けるがそこまで飛べない

回避、感、体力に関しては幽香のおかげで高い

能力は曖昧だが意識下であれば干渉が効かないことだけは自覚している

第2話 紅魔館赤い霧変1 闇と？（前書き）

簡単に言おう！！戦いなんてなかった

第2話 紅魔館赤い霧変1 闇と？

僕は走っていた・・・なぜかというと・・・

「なんで妖精たち襲ってくるんだよ!!」

「この霧のせいで興奮してるんだと思うわ」

「迷惑だな!!」

妖精達が行き成り弾幕を放って来たからだ
相手にしてるとこっちが疲れるのでスルーしてたけど・・・

「霊夢！一番密集してるところどこ!？」

「え？えつと右らへんよ」

「魔理沙やるよ!!」

「なるほどね、わかったぜ」

僕と魔理沙は少量の弾幕をそこに投げた

「よし、結構片付いたね」

「考えたわね」

「確かに広範囲に撃つより、密集したところに撃ったほうがあてやすいもんな」

少しあいた所に来ると妖精からの攻撃がやんだ

「・・・あれは・・・」

前方の方から黒い塊がふよふよと飛んできた

「妖怪？」

「多分そうじゃないの？」

そう話していると塊は形を崩し始め金色の髪を肩口まで伸ばし、黒つばい服を着て頭の方には赤いリボンを付けた少女が現れた。

「君は？」

「うーん？私はルーミアだよ」

話せるみたいだね

「ね〜ね〜」

「？なに？」

「あなたは食べてもいい人間？」

いきなり物騒である

「ダメに決まってるでしょ」

たしかに、大丈夫だと答える人間はいない

「え〜でもお腹空いたしな・・・」

「・・・あ、じゃあこれ食べる？」

「？なに？」

僕はおにぎりを取りだしルーミアにあげた

「わ〜い」

(二人とも今のうちに・・・)

(わかったわ)

(了解だぜ)

「まだあ・・・ってあれ？」

ルーミアが気づいたころには僕達は逃げていた

「意外と逃げれたわね・・・」

「追いかける気はなかったみたいだしね」

「でも、さすがに疲れたな・・・」

ずっと走っていたためか足がちょっときつい・・・

「そうだねちょうど湖で見晴らし良いし」

「休憩しましょうか」

僕達は休憩しようと立ち止まると、いきなり氷柱が飛んできた

「おっと」

「勝手に私の土地に入るなッ!!」

そこには氷の羽の妖精が・・・

「あゝチルノか」

「チルノ？」

「あの妖精の名前よ」

「そして自称サイキョーのバカだ」

魔理沙・・・その言い方は・・・

「相手にするのもだるいわね・・・」

「時間がかかりそうだね」

「じゃあ吹き飛ばすか」

「「え？」」

魔理沙の発言に振り向くと・・・ミニ八卦炉を取り出しており・・・

「いくぞ!!」

「え？」

あ、あれは・・・

「恋符「マスタースパーク」!!」

「わにゃ・・・」

「不意打ちね・・・」

「そうだね・・・」

魔理沙のはなつた極太レーザーはチルノを軽々と飲み込み、吹き飛ばした

「さ、邪魔は居なくなつたし休憩しようぜ」

「「・・・」」

時折この子の行動が恐ろしい・・・

第2話 紅魔館赤い霧変1 闇と？（後書き）

昔、マジでチルノは中ボスかな？と思ってた時期があった

紅魔館赤い霧変2 門番(前書き)

やっぱり戦闘シーン下手だな・・・

紅魔館赤い霧変2 門番

僕たちは休憩していると

「あややく、ここにいましたか」

空から文が飛んできた

「どうしたのよ、パパラッチ」

「失礼な！私は清く正しい射命丸文ですよ」

「文、どうしたの？」

「あ、明久君もいたんですね。いや、異変について聞こうと神社に向かったのですが、もうお出かけになられて探してたんですよ」

「山は大丈夫なの？」

「警備をしると言われましたが・・・抜け出してきました（キリッ）」

「アハハハハ」

文らしいな

「そういえば・・・文」

「はい、なんでしょうか？」

「どうもこつちが霧が濃いみたいだけどこかあるの？」

「こつちですか？たしか紅魔館ですね」

「紅魔館？」

「吸血鬼の住む館ですよ」

吸血鬼か・・・霧・・・吸血鬼・・・

「なるほど・・・」

「どうかしたの？明久」

「いや、今回の異変の犯人その吸血鬼かもって思ってたね」

「たしかにレミリアさん日光苦手そうですもんね」

「レミリア？」

「レミリア・スカーレット、紅魔館に住む吸血鬼ですよ」

まあ断定できないけど・・・

「紅魔館に向かおう」

「だな」

「では私も取材についていきます」

こうして僕たちは紅魔館へと向かった

side 霊夢

「・・・文」

紅魔館に向かいながら、私は明久にばれないように文に話しかけた

「はい、何でしょうか？霊夢さん」

「あんた明久に結構ペラペラと話してたけどいいの？」

こいつは結構話をはぐらかしたりするのに、明久が質問している時
すらすらと事実を話していた。

何を考えているの？こいつは・・・

「別に問題ありませんよ。今さらですし」

「今さら？」

「これでも私は霊夢さんより明久君と付き合い長いんですよ？それに……」

たしかにこいつのほうが長いわね……

「明久君に対してなぜだか話をはぐらかしたりできないんですよ」

「確かにそうね……あの隙間妖怪ですら明久といると胡散臭くないし」

「それは是非とも見てみたいですね」

やめときなさい……なんだか世界の終わりを見た気分になるから……

慣れたけど

side 明久

妖精からの襲撃を回避しながらも僕たちは紅魔館の前にたどりつくが……

「止まりなさい！！」

僕たちの前に赤い髪の子ヤイナ服を着た女性が立ち塞がった

「あの人は……」

「彼女は紅美鈴という妖怪ですよ」

「あ、妖怪なんだ」

「はい、そしてこここの門番です」

「私たちはこの主に話があるの退いてくれないかしら？」

霊夢が美鈴に話しかけるが

「私は門番です。如何なる理由があるうと、許可なくここは通せません！！」

「どうしても？」

「お嬢様から誰も通すな、と言われていきますので」

多分ここで当たりかな

「仕方ないわね、私が行くわ」

「大丈夫？霊夢」

「霊夢さん、彼女は接近戦が得意なのでお気をつけて」

「わかったわ。行ってくる」

こうして霊夢と美鈴の勝負が開始した

「しかし意外だぜ・・・」

「何が？」

「こんなこと起しときながら、ちゃんと弾幕勝負するんだなってな」

「それは確かに。結構浸透したみたいだね」

「烏天狗総勢で広めましたからね」

「うん、あの時は本当にありがとね」

「いえいえ、明久君の頼みですから」

「お、結構面白いことになってるぜ？」

弾幕勝負は、霊夢はある一定で距離を置き、美鈴に関してはどうも遠距離戦は苦手らしく戦況は霊夢に傾いていた

「くっ！彩符「極彩颱風」！！」

どうも押し切られる前に状況を変えようとしてるようだ

彼女から様々な色の弾幕が零れ落ち、雨のように霊夢に降り注いだ

「ちっ」

霊夢もさすがに攻撃しながら避けれないと踏んだのか、弾幕をやめ、回避に専念している

しかし

「甘いわね、夢符「封魔陣」」

霊夢はお札を投げると、札は分裂し美鈴の弾幕をよけながら彼女に殺到する

美鈴はまさかあのタイミングで攻撃が来るとは思ってたからしく命中心

煙がはれると気絶していた

「さ、進むわよ」

「そっだね」

僕は彼女を壁の近くに寝かせ門をくぐった

紅魔館赤い霧変2 門番(後書き)

ここでの文はそこまでパパラッチじゃない!!多分

紅魔館赤い霧変3 七曜の魔女(前書き)

友「影月！！明久のテーマ曲決めたぞ！！」

影「考えたじゃなくて決めただね・・・」

友「深蒼ってやつで聞くか？」

影「いや、持つてるからいい」

友「・・・orz」

サブタイトルは彼女の二つ名です

紅魔館赤い霧変3 七曜の魔女

「赤いね・・・」

僕は紅魔館に入って最初に言ったのはこの一言だった
壁、絨毯すべて真っ赤なのだ

「悪趣味ね・・・」

「吸血鬼だし仕方ないんじゃないか？」

「ところでどこに向かうのですか？」

文の言うとおりだね・・・

「文、レミリアって日光苦手なんだよね？」

「そうですねどうかしましたか？」

「なら・・・日光が来ない地下かな？」

「確かにそうだな」

僕達がそう言っていると

「明久、多分これ地下に行く道よ」

霊夢・・・まあ、行くか

少年少女移動中

そこには……

「……すげ〜」

「確かにすごいわね」

「……図書館？」

大きな図書館が広がっていた

「大量の本ですね」

一般的な本から幽香が言っていた魔道書まで大量にある……

しばらく進むと

「此処に何のようかしら？」

紫の髪の少女がいた

「あんたがレミリア・スカーレット？」

「違うわ。私はパチュリー・ノーレッジ。七曜の魔女と呼ばれているわ」

「じゃあ、レミリア・スカーレットは何処に？」

「彼女ならこの館の主の間にいると思うわ」

あら……予想外れた……

「ごめん……」

「いや普通そう思うから仕方ないぜ」

「じゃあ行きましょー」

僕は来た道を戻ろうとすると

「待ちなさい」

「なに？」

「態々、侵入者をそのまま見逃すと思う？」

確かにそうだよね〜ハア・・・

「よし！！ 相手が魔法使いなら私の出番だな！！」

「魔理沙、大丈夫？」

「おう！！」

そう言うと、魔理沙はパチュリーと相対する。

そして弾幕ごっこが始まった

パチュリーは細かい弾幕を放ちながら、時折太いレーザーを四方向に向けて放つと言う

スタイルを取っている

魔理沙はというと持ち前の速さで弾幕をよけながら直線的な弾幕を撃っていた

「随分とちょこまかと動くわね」

パチュリーは感心した様にそう言う、飛ぶ速さなら多分魔理沙は3人の中で一番早い

「それでもスピードには自信があるんでね」

「でも……これならどうかしら？」

パチュリーはそう言いながらスペルカードを取り出し、

「火金符『セントエルモピラー』」

上下から色の違う弾幕が魔理沙に迫ってきた

「おっと」

魔理沙は弾幕をばら撒くのをやめ、スピードを調整しながら避ける
しかし魔理沙も避けるだけで終わるはずがなく

「ならこつちも、恋符『ノンディレクショナルレーザー』」

無数のレーザーを魔理沙は発射し、そのうち数本がパチュリーに向
かう

「っ!」

パチュリーは回避すると距離を置き

「スピードも攻撃の手数の弾幕の数もある・・・なら、パワーはど
うかしら?」

パチュリーはそう呟き

「日符『ロイヤルフレア』・・・」

スペルカードを発動させる
しかし魔理沙は・・・

「悪いな。私はパワー勝負が一番得意なんだ」

笑ってそう言った

「恋符『マスタースパーク』!!」

魔理沙から極太レーザーが放たれる。

同時に、パチュリーからも炎の玉が発射される。二つの技はぶつかり合い、均衡し合う
だけど

「なっ!?!」

魔理沙のレーザーは少しずつ、パチュリーの火の玉を押ししていく

「そんな!?!」

「私はパワー勝負が一番得意なんだって。それに……」

「後ろには友達がいるんだ!!そんな友達の前で無様に負けれるわけねーだろ!」

魔理沙がそう言い放った瞬間、極太レーザーはパチュリーを呑み込んだ
んだ

極太レーザーが晴れると、パチュリーフラフラした様子で降下し、
本棚の上に着地
すると同時に膝を着いた

「勝ったぜ」

魔理沙は僕達にピースサインをしてきた

「じつじて、弾幕じつこの勝者は決まった

紅魔館赤い霧変3 七曜の魔女(後書き)

萃香のところとか話数短くなりそう・・・それ以上に弾幕ゲームじやなくなりそうだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6091z/>

僕と幻想郷と召喚獣 外伝

2011年12月24日11時46分発行